5

モンゴル語史における文字資料の位置づけについて
― 文字表記と円唇母音の音価推定の問題 ―

栗　林　均

本稿ではモンゴル語史の研究における文字資料の解釈と評価に関する問題を取り上げる。内容の一部は、2007年7月7・8日に東北大学東北アジア研究センターで開催された「モンゴル語のローマ字転写と翻字に関する諸問題」と題するワークショップにおける報告に基づいている。

1．方言の連続性の問題

Poppe［1965：18-24］は、モンゴル語史の時代区分の中で中期モンゴル語（Middle Mongolian）を12世紀から15（あるいは16）世紀の期間として、そこに少なくとも3つの方言グループがあるとした。3つとは、すなわち南部中期モンゴル語、東部中期モンゴル語、そして西部中期モンゴル語であるとして、それらを次のように説明している。

「南部中期モンゴル語は、現在のモングォル語（Monguor）、サンタ語（Santa）[1]、そしてダグル（Dagur）語の源であった。東部中期モンゴル語は、ブリヤート語（Buriat）とモンゴル語（すなわち狭義のモンゴル語[2]）の祖先であった。西部中期モンゴル語はモゴール語（Mogol）とオイラート語（Oirat）の祖先であった。

南部中期モンゴル語の資料は存在しない。東部中期モンゴル語はいわゆるパスパ文字のテキストの言語、『元朝秘史』の言語、そして14世紀の各種の漢蒙対訳語彙集の言語によってよく表される。...

西部中期モンゴル語は、13世紀と14世紀にイスラムの学者たちによって編纂された多くのアラビア語・モンゴル語およびペルシャ語・モンゴル語語彙集に基づいて研究することができる。...」[3]

「南部中期モンゴル語」という文献の存在しない方言グループを立てているのは、いわ

---

[1] サンタ語（Santa）は、現在の東郷（ドゥンシャン）語を指す。

[2] 狭義のモンゴル語には、ハルハ（Khalkha）、ダリガンガ（Dariganga）、チャハル（Chakhar）、ウラト（Urat）、ハラチン・トメト（Kharchin-Tumut）、ホルチン（Khorchin）、ウジュムチン（Ujumchin）、オルドス（Ordos）等の方言が含まれる（Poppe［1965：13-15］）

[3] Poppe［1965：21-23］

ゆる現代の「孤立的諸方言」の起源を存在する文献資料に求めることができないという以上の内容は無く、特に検討に値するものではない。しかし、東部中期モンゴル語と西部中期モンゴル語という方言の区別については、実際の文字資料と現代の諸方言との関係について述べており、その妥当性について改めて検討しておきたい。

13・14 世紀に属するモンゴル語を代表する文字資料として、(1)パスパ文字資料(2)漢字音訳資料(3)アラビア文字資料の 3 種類があることは周知の事実である。これらのうち、パスパ文字資料と漢字音訳資料は中国の元朝およびその後の明朝の内部で使用されたもので、言語的な特徴も極めて類似している。これに対して、アラビア文字文献はチャガタイ汗国で作られた資料であり、言語的特徴においてパスパ字・漢字音訳資料とは著しく性格が異なることが知られている。モンゴル帝国の東部と西部に属するこれらの文献資料が、当時の方言の違いを表すものとみなすことは妥当と考えられる。

しかし、東部中期モンゴル語が現代のモンゴル語とブリヤート語の祖先であり、西部中期モンゴル語がモゴール語とオイラート語の祖先だという図式は、にわかには首肯しがたいところがある。ここには、大きく 2 つの問題が含まれている。第 1 は、中期モンゴル語が現代のモンゴル語の直接の祖先であるという一般的な図式の問題であり、第 2 は具体的に西部中期モンゴル語と東部中期モンゴル語が現代のどの言語・方言と直接結びついているかというより具体的な問題である。

「同一の言語」としての共通性を持つ、時代的に異なる資料があった場合、時代的に古い資料に反映されている言語状態（これを A とする）から時代的に新しい資料に反映されている言語状態（これを B とする）に発展したと考えがちである。これは、A と B とが連続していることを想定しており「A が B に変化した」「A から B が生じた」あるいは「A は B の祖先である」と表現することは可能である。こうした関係は当然あり得る事例であるが、「あり得る事例」のすべてではなく、実際はむしろ稀な事例に属するということを改めて確認しておく必要がある。A と B の言語状態の関係で、言語史の中で実際に観察されるより多くの事例は、それらが「同一の言語」の中の別の方言を反映している場合である。これについて、ソシュールは講義の中で次のようにまとめている。

> 「あいつぐ年代において書によって固定された二つの言語形態が、同一の特有語を、その歴史の二つの時点において、精密に代表していることは、きわめてまれである。たいていのばあい、われわれが当面するものは、たがいに言語的継続をなさない二個の方言である。」[4]

A と B の言語状態が「連続している」ということは、A の言語状態からの変化によって

[4] ソシュール［1972：307］

Bの言語状態のすべてが生じたということを意味している。したがって、AとBとの間に「言語変化」によって説明することのできない差異が存在する場合には、両者が「連続している」というのは厳密な意味では正しくない。将来の研究によってそれらの差異が「言語変化」として説明された場合には、「連続している」という関係が確かなものとなる。

こうした観点からモンゴル語史の問題に目を向けた場合、先の（東部・西部）中期モンゴル語が現代のモンゴル系言語・方言の祖先であるとしているのは、精緻な比較研究の結果ではなく、むしろ見通しを示しているとみなすべきであろう。

言語状態の連続性の問題に関連して『元朝秘史』の言語に代表される東部中期モンゴル語と現代モンゴル語（ハルハ方言）の関係について考えてみたい。『元朝秘史』の言語とハルハ方言を比較した場合、その大部分は前者から後者への「言語変化」として合理的に説明される。しかし、両者の間には「言語変化」としては説明できない差異が依然として存在していることも事実である。両者の間にある大きな差異のひとつは、喉子音に関するものである。ハルハ方言を含む現代のモンゴル語の多くは喉子音に硬（tense）と軟（lax）の対立があるのに対して『元朝秘史』に代表される東部中期モンゴル語の資料ではそれらは区別されていない。例：

『元朝秘史』	現代モンゴル語
qara「黒い」	xap「黒い」
qar 「手」	rap「手」

この一例に限らず、東部中期モンゴル語では喉子音の硬（tense）と軟（lax）の対立が表記の上で区別されていない。

こうした2つの言語状態が「連続している」と仮定した場合、この関係は次のように説明することができる。

(1)東部中期モンゴル語には喉子音の硬（tense）と軟（lax）の対立があったが、なんらかの理由でそれが漢字やパスパ文字の表記に反映されなかった。

(2)東部中期モンゴル語には喉子音の硬（tense）と軟（lax）の対立がなかった。分岐的音変化を引き起こした「音声的条件」は不明であるが、現代モンゴル語の二つの喉子音は、東部中期モンゴル語のひとつの喉子音が二つに分裂して生じたものである。

いずれの推定にも、それを支える確かな理由が欠けている。それが未解決のうちは、「東部中期モンゴル語は現代モンゴル語の祖先である」という命題も仮説の域を出ることはできない。

他方、両者の関係が「連続していない」と仮定しする考え方もありうる。その場合、東部中期モンゴル語と現代モンゴル語はともに共通の起源（モンゴル祖語）に由来するが、

それらは一直線上に並ぶわけではなく、東部中期モンゴル語も、現代モンゴル語もモンゴル祖語から言語変化を蒙った結果の言語状態である。そして東部中期モンゴル語に生じた言語変化のひとつは「喉子音の硬（tense）と軟（lax）の対立が解消してひとつに融合した」変化だったと見なされる。

Poppe のいう西部中期モンゴル語とモゴール語、オイラート語との関係に目を移した場合、さらに大きな問題がある。確かにモゴール語とオイラート語は他のモンゴル系諸言語・諸方言と比べて西部に位置している。しかし、オイラート語は言語特徴の上では上に見たモンゴル語に近く、その大部分は『元朝秘史』に代表される東部中期モンゴル語からの「言語変化」として合理的に説明される。つまり、オイラート語はモンゴル語の内部あるいは近隣に位置する言語（方言）として位置づけられるべきものである。またモゴール語に関しては、これを言語史の中に位置づけるに足る情報は無いといっても過言ではない。こうした状況の中で、「西部中期モンゴル語はモゴール語（Mogol）とオイラート語（Oirat）の祖先であった」と言うのは、あまりにも短絡的に過ぎるであろう。

アラビア文字で表記された西部中期モンゴル語と現代のモンゴル系言語・方言との関係は西部中期モンゴル語の資料の扱いにも大いに関係している。モゴール語は暫く置くとして、「西部中期モンゴル語はオイラート語の祖先であった」と見なした場合、オイラート語のすべてはアラビア文字で表記された西部中期モンゴル語の言語状態からの言語変化によって生じたことになる。

オイラート語には 4 種類の円唇母音があるが、アラビア文字で表記される円唇母音の種類は 1 種類だけである。1 種類の文字表記に対して、ポッペがアラビア文字表記モンゴル語ののローマ字転写で取っている 4 種類の母音の書き分け、さらに短母音と長母音の書き分けは、すべて「西部中期モンゴル語がオイラート語の祖先であった」という仮説に基づいたものに他ならない。

アラビア文字で表記されたモンゴル語を見た場合、まず目を奪われるのは、チュルク語からの大量の借用語の存在、語順の変化、名詞と動詞における複数接尾辞 -lar/-ler の使用といった大規模な言語的な改新である。こうした言語状態からとオイラート語生じた、つまり、これらが直線的に「連続している」という図式には、納得しがたいところがある。

『元朝秘史』の言語が、独自の発展を遂げたひとつの言語状態であるという可能性があるのと同様に、むしろそれ以上に、アラビア文字で表記された「西部中期モンゴル語」も、独自の発展を遂げたひとつの言語状態として存在していた可能性は大きい。その場合、アラビア文字で表記されたモンゴル語の言語状態、特に音価の解釈は根本的に再検討されなければならない。

以下では、文字資料の解釈の事例としてモンゴル文語の「ローマ字転写」について論じるが、ここでの「ローマ字転写」はモンゴル文語の音価を表している。

２．モンゴル文語の円唇母音を表す文字のローマ字転写について

２－１．第１音節の円唇母音の扱い

モンゴル文語をローマ字転写する際に、ひとつのモンゴル文字が二つ（以上）のローマ字によって転写される場合がある。モンゴル文語ではそれを表記するモンゴル語の音韻の数と比較して、文字の種類が少なかったために、同じ文字でモンゴル語の二つ（以上）の音を写したものと考えられる。

モンゴル文語で円唇母音を表わす文字は２種類だけである。それらは、単独形で言えば、 と である。モンゴル文語の他の文字と同様、これらも単語の中に現われる位置によって、語頭、語中、語末で字形が変わる。 は、語の第１音節において語頭では 、語頭以外では という字形となる。これに対して は、語の第１音節において語頭では 、語頭以外では という字形になる。しかし、 と は語の第２音節以降では字形による区別がなくなり、どちらも語中では 、語末では という字形となる。

Poppe（1954）は、モンゴル文語の円唇母音を表わすこれらの文字をローマ字転写する際に、 に対しては o と u で転写し、また に対しては ö と ü で転写し、都合４つのローマ字を当てている（表１．を参照）。

表１．モンゴル文語で円唇母音を表わす文字（２種類）

	単独形	非単独形			
		第１音節		第２音節以降	
		語頭	語頭以外	語中	語末
o, u					
ö, ü					

・ のローマ字転写に o, u を当てている例：

olan「多くの」　**ulam**「益々」

doloγan「七」　**dulaγan**「暖かい」

・ のローマ字転写に ö, ü を当てている例：

ölǰei「幸運」　**ünen**「真実」

nökür「友人」　**nüke**「穴」

モンゴル文語の同じ文字（同じ字形）を別々のローマ字で転写するのは、モンゴル文語が成立した時代の口語にそうした発音（音韻）の違いがあったと推定しているからに他ならない。そうした推定の根拠としては、第１にモンゴル文語の成立した時代に比較的近いモンゴル語の書記記録であるパスパ字資料と漢字資料で、そうした音の違いを表記し分けていることである。

表２.パスパ字、漢字表記の例

モンゴル文語		パスパ字		漢字	
	「多くの」	o	olan	o	olon(斡欒)
	「国」	u	ulus	u	ulus(兀魯思)
	「色」	ö	öŋge	o	oŋge（汪格）
	「真実」	ü	ünen	u	unen（兀年）

第２の根拠としては、(モンゴル文語に対応する）現代モンゴル語でそれらを異なった母音として区別していることである。表３.のハルハ方言の例がその典型的な例である。

ところで、現代のモンゴル語はハルハ方言だけではない。ブリヤート方言も、比較的早くから研究が行われ、行き届いた記述がなされてきたが、円唇母音に関してはハルハ方言で区別している ö(ɵ)と ü(ɣ)の区別がない。ブリヤート方言では、次のようにハルハ方言の ö(ɵ)と ü(ɣ) に対して ü(ɣ) が対応している。

表３.

モンゴル文語		ハルハ方言		ブリヤート方言	
	「多くの」	o(o)	олон	o(o)	олон
	「さらに」	u(y)	улам	u(y)	улам
	「色」	ö(ɵ)	өнгө	ü(ɣ)	үнгэ
	「真実」	ü(ɣ)	үнэн		үнэн

このような対応によって、ハルハ方言の４種類の円唇母音（o u ö ü）は、より古い時代にブリヤート方言と同様に３種類（o u ü）だったと推定することは可能であろうか？歴史言語学の方法論では、「音声の分裂は音声的な条件の違いによってのみ引き起こされる」こ

とを前提としている。これに従えば、ひとつの音が複数の音に分裂したと言うためには、そこに「音声的な条件（の違い）」が存在したことを示さなければならない。他方、ひとつの音（の一部ではなくすべて）が別の音に融合する場合、すべてにあてはまる（無条件の）変化であることから、指定するべき条件はない。要するに、現在の研究段階でハルハ方言の４種類の円唇母音が、ブリヤート方言と同様の３種類の円唇母音に由来すると推定することは不可とせねばならない。

さらに、ダグル語では円唇母音は o と u の２種類だけである。大まかに言えば前者はハルハ方言の o(o) と u(y) に対応しており、後者はハルハ方言の ö(ө) と ü(y) に対応している。（表４．参照）

表４．

モンゴル文語		ハルハ方言		ダグル語	
ᠣ	ᠣᠯᠣᠮ「(馬の)肚帯」	o(o)	олом～олон	o	olom「(馬の)肚帯」
	ᠣᠷᠲᠤ「長い」	u(y)	урт		ort「長い」
ᠥ	ᠥᠩᠭᠦ 「色」	ö(ө)	өнгө	u	ungu「顔色」
	ᠥᠨᠦᠨ 「真実」	ü(y)	үнэн		unun「本当の」

この場合にも、ハルハ方言の４種類の円唇母音が、より古い時代にダグル語と同様に２種類だったと推定することができないのは、ブリヤート方言の場合とまったく同様である。モンゴル文語の基礎にあった当時の口語がダグル語と同様に２種類の円唇母音しかもたず、それがそのままモンゴル文字の字形に反映されているという推定は不可能ではないが、その場合には、現代のハルハ方言が 13 世紀の口語に由来するという仮定を捨てた上で、２つの円唇母音しかない 13 世紀の口語の状態より前に、ハルハ方言のような４つの円唇母音をもつ状態があったとしなければならない。

こうした推論の手順に従えば、もしもパスパ字や漢字等で表記されたモンゴル語の書記記録が存在しなくても、ハルハ方言のような現代モンゴル語の資料だけからも、モンゴル文語の基礎にあったと考えられる当時の口語に４種類の円唇母音が存在していたと推論することが可能である。

このように、モンゴル文語において円唇母音を表わす２種類の文字（字形）をローマ字転写する際に４種類の円唇母音として表記し分けているのは、主として現代モンゴル語で４種類の円唇母音を区別していることを拠りどころとしており、同時にそれがモンゴル語

のより古い円唇母音の状態を反映していると見なされているためと言うことができる。

こうしたローマ字転写方式の問題点として、方言間において不規則な対応がある場合を指摘することができる。

現代のモンゴル語で４種類の円唇母音をもつのはハルハ方言だけではなく、内モンゴルのチャハル、バーリン、オルドスを初めとする諸方言、新疆のオイラト方言、ロシアのカルムイク語等々、少なくない。多くの場合、これらの言語・方言における４つの円唇母音は規則的に対応しており、これによって共通の起源を推定することが可能となる。ある場合には、こうした方言間で、同じ（起源の）単語で、（円唇）母音の種類が合致しないことがあるが、それも一方の方言に起こった音声変化の結果として説明できる場合が多い。たとえば、モンゴル文語の 「矢」、 「弓」の第一音節の母音に対応して、ハルハ方言では u が、バーリン方言では o の母音が対応している。この場合、バーリン方言の o は、「母音 u が隣接する唇子音 b, m の影響で o に変化した」音韻変化の結果生じたものと考えられる。（ : ɔ・ʊ 《 》1999.4, 193-199）。

しかし、方言間の円唇母音の対応が規則的な対応からズレていて、それがどのようにして生じたのか必ずしも明らかでない場合も存在する。そうした場合、どちらが元来の母音に近いのか（そしてどのようにローマ字転写するべきなのか）を判定することは困難となる。たとえば、モンゴル文語の 「暁」（ 「夜が明ける」）に対応する語は、ハルハ方言で ǖr（ɣɣp）、カルムイク語で ör（ɵp）であって、母音の種類（長さも）が異なる。また、モンゴル文語の 「編む」に対応する語は、ハルハ方言で gör-（rɵp-）、カルムイク語で gür-（rɣp-）であり、やはり母音の種類が異なっている。こうした不規則な対応に対しては、他の資料を参照にしつつ、個々の語の歴史を明らかにして行く以外にない。

２－２．　第２音節以降の円唇母音の扱い

ここではモンゴル文語で第１音節に母音 o をもつ語の第２音節以降の円唇母音を o と u のいずれで転写するか、同様にモンゴル文語で第１音節に母音 ö をもつ語の、第２音節以降の円唇母音を ö と ü のいずれで転写するかという問題を検討する。

第１音節の円唇母音の扱いと第２音節以降の円唇母音の扱いの決定的な違いは、ハルハ方言をはじめ、内モンゴルのモンゴル語諸方言、ブリヤート語、カルムイク語等々、現代の多くのモンゴル語方言で、第２音節以降の短母音は「弱化母音」となり、独立性を失った存在となっていることである。そこでは、第１音節の母音は明瞭に発音されるが第２音

節以降の母音、特に短母音は第１音節の母音と比較して弱く・短く発音される。第２音節以降の母音の音質は、第１音節の母音によって決まる場合が多い。したがって、モンゴル文語で円唇母音を表わす文字のローマ字転写に関しても、第２音節以降の母音に関しては現代の諸言語・諸方言の母音を証拠とすることが困難となる。

これに対して、13 世紀のモンゴル語口語に時代的に近いパスパ字や漢字で表記された書記資料においては、第１音節の母音 o の後に母音 o も u も現われ、第１音節の母音 ö の後に母音 ö も ü も現われる。

【例】

	第１音節 o の後に o	第１音節 o の後に u
パスパ字	dot'ora「中に」	t'osun「油」
	qot'ola「すべて」	yosun「きまり」
	第１音節 ö の後に ö	第１音節 ö の後に ü
	k' önörge「麹、酵母」	k'örögüd「像（複数形）」
	örgön「広い」	ögün「与え（形動詞形）」

現代諸方言の中で、第２音節以降の母音を比較的よく保存していることで知られているのは 20 世紀前半にモスタールト（Antoine Mostaert）が記録したオルドス方言である。そこでは、他の方言に比して第２音節以降の母音の弱化の程度が小さく、独立した音質を持っているとみなすことができる。しかし、オルドス方言においても第１音節に母音 o をもつ語の第２音節以降に現われる円唇母音はほとんどの場合 o であり、u が現われるのは語末の開音節に限られている。第１音節に母音 ö をもつ語の第２音節以降に現われる円唇母音もほとんどの場合 ö であり、ü は語末の開音節にしか現われない。

しかし、オルドス方言においては、第２音節以降の円唇母音の種類を推定するてがかりとなる興味深い現象があることが報告されている。それは、ポッペ［Poppe : 1951］が指摘した次のような現象である。オルドス方言には、第１音節の u が他方言の o に対応している一連の語がある。たとえば、ハルハ方言の mod(мод) 「木」という語に対応するオルドス方言は mudu「木」である。これはオルドス方言で元来第１音節にあった母音 *o が後続する音節の母音 *u の影響で u に変化した結果であると推定される。つまり、こうした場合には、古い時代に語の第２音節に母音 *u があったとすることで合理的な説明が可能となる。

ポッペ［Poppe 1951 : 192-194］が挙げている例は、次の 13 語である。対応するハルハモンゴル語、モンゴル文語形、ローマ字転写形を対照して掲げる。なお、オルドス方言の

表記は、Street[1966]の音韻表記に従っている。

*u に先行する *o

オルドス方言	ハルハモンゴル語	モンゴル文語形	ローマ字転写
mudu「木」	mod (мод)		modu
udu「星」	od (од)		odu
urdu「宮殿」	ord (орд)		ordu
ulusu「麻縄」	ols (олс)		olusu
gulumta「竈」	Golomt (голомт)		γolumta
gumuda-「悔やむ」	Gomd· (гомд-)		γomuda-
dubtul-「突進する」	dobtol· (довтол-)		dobtul-
dusu「油」	tos (тос)		tosu
urgu-「逃げ出す」	oroG· (орго-)		orgu-
gultur-「剥落する」	xoltor· (холтор-)		qoltura-
kumugalǰi-「欲張る」	xomGolz· (хомголз-)		qumuγalǰi-
yusu「礼儀」	yos (ёс)		yosu
suŋgu-「選ぶ」	soŋG· (сонго-)		songγu-

オルドス方言における第1音節の u が他方言の o に対応している例は、モスタールト（Antoine Mostaert）の『オルドス語辞典』*Dictionnaire Ordos*（Peking, 1941-44.）にこれ以外にも少なからず見出すことができる。

オルドス方言において「元来第1音節にあった母音 *o は後続する音節に母音 *u があった場合にその影響で u に変化した」という音声変化が起こり、それが他の音声的条件に妨げられたり、その上に別の音声変化がかぶさったりしていないとすれば、オルドス方言の第1音節に母音 o をもつ語では、後続する音節に円唇母音 u はなかったということになる。つまり、オルドス方言で第1音節に母音 o をもつ語では、第2音節以降の円唇母音は元々 o だったということになる。

したがって、次のような語では第2音節以降の円唇母音は o とローマ字転写することが適当と考えられる。

オルドス方言	モンゴル文語形	ローマ字転写
moŋgol「モンゴル」		mongγol
botogo「子ラクダ」		botoγo

domog「伝説」		domoγ
kolbo-「つなぐ」		qolbo-
oro「場所」		oro
etc.		

これと同様に、オルドス方言の第1音節の ü が他方言の ö に対応している一連の語が存在している。この場合はオルドス方言で元来第1音節にあった母音 *ö が第2音節の母音 *ü の影響で ü に変化した結果であると推定される。

ポッペ[Poppe 1951 : 201-202]が挙げている例は、次の7語である。カッコ内の語は同時に用いられる形であり、ポッペはこれを方言的な変異であろうとしている。

*ü に先行する *ö

オルドス方言	ハルハモンゴル語	モンゴル文語形	ローマ字転写
mürgü-(mörgö-)「叩頭する」	mörög-(мөргө-)		mörgü-
müŋgü(möŋgö)「銀」	möŋg(мөнгө)		mönggü
ürüm「乳膜」	öröm(өрөм)		örüm
ürgüsü(örgösü)「棘（とげ）」	örgös(өргөс)		örgüsü
ündür「高い」	öndör(өндөр)		öndür
üdü「羽」	öd(өд)		ödü
kürük「像」	xörög(хөрөг)		körüg

オルドス方言における第1音節の ü が他方言の ö に対応している例は、これ以外にも少なくない。

先の場合と全く同様に、オルドス方言において「元来第1音節にあった母音 *ö は後続する音節に母音 *ü があった場合にその影響で ü に変化した」という音声変化が起こり、それが他の音声的条件に妨げられたり、その上に別の音声変化がかぶさったりしていないとすれば、オルドス方言の第1音節に母音 ö をもつ語では、後続する音節に円唇母音 ü はなかったということになる。つまり、オルドス方言で第1音節に母音 ö をもつ語では、第2音節以降の円唇母音は元々 ö だったということになる。

したがって、次のような語では第2音節以降の円唇母音は ö とローマ字転写することが適当と考えられる。「盟友」

オルドス方言	モンゴル文語形	ローマ字転写
ölögčin「牝犬」		ölögčin
örö「みぞおち」		örö

tölö-「償う」　　tölö-

nökör「盟友」　　nökör

etc.

上に見た音声変化が貫徹しているものとすれば、オルドス方言で第 1 音節に母音 o をもつ語に対応するモンゴル文語では、後続する音節の円唇母音は o をもってローマ字転写するべきであり、オルドス方言で第 1 音節に母音 u をもつ語に対応するモンゴル文語では、後続する音節の円唇母音を u で転写するべきである。同様に、オルドス方言で第 1 音節に母音 ö をもつ語に対応するモンゴル文語では、後続する音節の円唇母音は ö をもってローマ字転写するべきであり、オルドス方言で第 1 音節に母音 ü をもつ語に対応するモンゴル文語では、後続する音節の円唇母音を ü で転写するべきであろう。

参考文献

Mostaert, Antoine, *Dictionnaire Ordos*. 3 vols. The Catholic University, Peking, 1941-44.

Poppe, Nicholas, "Remarks on the vocalism of the second syllable in Mongolian", *Harvard Journal of Asiatic Studies* 14 (1951), pp.189-207.

Poppe, Nicholas, *Grammar of Written Mongolian*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1954.

Poppe, Nicholas (tr. and ed. John R. Krueger). *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1957.

Poppe, Nicholas, *Introductio to Altaic Linguistics*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1965.

Street, John C., "Urdus phonology: a restatement," *Ural-Altaische Jahrbücher* 38 (1966), pp. 92-111.

Лувсандэндэв, А. : *Монгольско-русский словарь (Монгол орос толь)*. Государственное издательство иностранных словарей. Москва, 1957.

Черемисов, К.М. : Буряад-ород словарь. Советская энциклопэдия, Москва, 1973.

恩和巴图『达汉词典』内蒙古人民出版社, 1983.

フェルデナン・ド・ソシュール（小林英夫訳）『一般言語学講義』岩波書店、1972.